

戦争のエポック / 芸術のメルクマール
The Epoch of War / Monuments of Art

高島直之

TAKASHIMA Naoyuki

I—1900▶▶▶▶▶1913

世紀末の処理と新しい美学の試行：
「フォーディズム」と「未来派」

1900年のアート状況とえば、すでに19世紀後半・末期を席捲した印象派やアル・ヌーヴォーが退潮し始めていた。画家P・ゴーガンが、印象派の成果をコピーしながら、そこに安易な近代的味つけをして怠惰に描きつづける凡百の絵描きたちの跳梁跋扈を呪いながら没したのは、1903年のことだった。しかし、欧米を中心に印象派が広く知られるようになったのはこの時代であり、その諸作品はアメリカの画商を通して国際的な市場にシフトしていった。1900年パリの地下鉄が開通し、H・ギマールはその出入口のデザインを担当したが、それは、W・ベンヤミンが言ったような「群衆=遊歩者の最後の領域たる」デパートのファサード装飾を思わせる。そのデパートとしての効果は、群衆がヴェールとなり、見慣れた都市が幻像と化して、あるときは都市が風景となり、あるときは部屋となって遊歩者を誘惑するものだ。ともベンヤミンは記しているが、そのヴェールを剥ぎとって、街路の生な現実感を映しだしたのは、写真家のE・アジェであった。

19世紀後半以来のテクノロジーの顕現は、蒸気機関車、鉄橋や駅舎といった鉄道敷設など都市インフラに多くみられるが、シカゴ派建築にみられるガラスと鉄の高層ビルの建設技術は、20世紀に入ってA・ロースやA・ベレの住宅・アパート工法に解き放たれ、また都市計画の可能性も引き寄せた。印象派は身近な日常風景を題材に、それをあたかも異邦人がみるように切り取ってみせたのだが、その親密な叙景の多くは、パリ・コミューン(1871)の市民戦争の瓦礫の跡に構想されたものである。印象派がその叙景を逆遠近法で捉えようとしたところは、ベンヤミンと通底するものがあり、一方、土木から建築計画

1900

は遠近法を具体化していった。

1903年にフォード社(米)が設立されたが、H・フォードは1907年に株式の支配権を確立し、翌年にT型フォードを発表。初期は静止式組立法をとったが、1913年にはライン生産方式に切り替え、27年に製造中止するまでに1500万台のT型フォードを生産した。この、機能性が高く良いものを低価格で大量に供給すれば人々の豊かな生活が確保される、というイデオロギーは少なく見積もって1970年代までの世界を覆ったものである。フォーディズムこそが20世紀を支配した「平準化」という資本主義的民主主義の核であり、平準化ゆえの労務管理法も含めたドラステックなアメリカ型産業主義のありかたが広まっていた。

フォーディズムが立ち上がった1907年に、立体派の起点となったP・ピカソの《アヴィニョンの娘たち》が発表され、またドイツ工作連盟(DWB)が結成されたのも同年であった。DWBも製品の「平準化」=「規格化」を目的としたが、立ち遅れたドイツの産業経済を背景に成立したものであり貿易振興を旨としていた。この1900年から10年頃にかけては、画家H・マティスらがフォーヴィスムを開始し、キルヒナーたちの橋^{ブリュック}派やクビーンらの青^{ブルー}騎士グループの表現主義が登場し、後者グループのキャンデンスキーは1910年に初めて水彩による抽象画を描きはじめた。

1909年にはF・T・マリネッティが未来派の宣言を発表している。この時代のヨーロッパ芸術運動の密度の高い集約化されたありようは、後の日本での新興芸術(前衛美術)の受容が、「印象派・立体派・フォーヴィスム・表現主義・未来派・抽象画」の諸傾向を混在したまま、曖昧かつ一緒くたに受け取る原因ともなった。ともあれ、マリネッティの宣言にみる「革命、メトロ

リネッティの宣言にみる「革命, メトロポリス, 労働者, 電気, 兵器庫, 造船所, 駅, 工場, 橋, 汽船, 鋼鉄, 機関車, 飛行機」といったキーワードは, ヨーロッパの伝統的な空間と時間を消滅させ(スピード!), 旧社会の清掃者として「戦争」を礼賛するものであり, そのイタリア国家統一運動のただ中で醸成された愛国的心情は, 1930, 40年代のファシズム政治体制に接続していった。

19世紀末には夥しい数の国家間戦争, 労働運動, 植民地への侵攻や民族独立の叛乱が起きたが, 1898年の米西戦争でアメリカは, 95年に発明された映画の教育的機能を早々に見抜き, ナショナリズムの高揚のメディアとして利用していった。またアル・ヌーヴォーの絶頂期の1900年に開かれたパリ万国博覧会では, リュミエール兄弟たちが大型スクリーンでシネマトグラフの上映をして, アートとテクノロジーの出会いを演出した。

[Photo Credit]

12—©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2000